



Title	日比野寛と「運動」・「駈歩」-愛知一中校長としての実践を中心に-
Author(s)	寺島, 善一
Citation	明治大学教養論集, 155: 39-57
URL	http://hdl.handle.net/10291/12163
Rights	
Issue Date	1982-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

日比野寛と「運動」・「駈歩」

——愛知一中校長としての実践を中心に——

寺 島 善 一

序

今日、人間の健康のためにスポーツが欠くべからざるものであるという認識は、Europe Sports for all Charter や UNESCO の体育・スポーツ国際憲章をまつまでもなく明らかなこととなっている。しかし、スポーツといえば従来は、チャンピオンシップスポーツが中心となっていた。「国民スポーツ」「大衆スポーツ」がクローズアップされて来たのは1960年代以降のことである。

我国の大衆スポーツの歩みも、60年代以前は蝸牛のような歩みであった。ここに研究対象とする「日比野寛」は3/4世紀も以前より「大衆スポーツ」「国民スポーツ」の普及に力を注いでいる。また愛知一中校長として、その中学校教育の中に「運動・体育」を中核に捉えた実践をしている。今日、その主旨が変節し、過熱ぎみとなり、多くの問題をかかえている、学校における運動部のあり方の範となる先駆的实践者でもある。この明治後期・大正前期という時代的背景の中で、日比野をして、如何にこのような「運動」「体育」「国民スポーツ」に関する思想を形成せしめたのか、史料を中心として探ってゆきたい。

1. 中学校管理と運動

日比野寛（1867（慶応2）年～1950（昭和25）年）が、愛知県第一中学校

(現在の旭丘高校)校長に赴任するのは1899(明治32)年のことである。その当時の中学校の多くは蛮風・俠気の生徒らが横行し、種々の乱暴、同盟休校などが頻発していた。

文部大臣・樺山資紀は、このような状態を見かねて、文部省訓令を発している。

「本大臣就任の始めより学校の事態に関し、衷心ひそかに憂慮するところあり。これをもって本年4月、地方長官召集の機に際し、本大臣は学校の風紀を正し、規律を厳にすべきことを反復披陳して、その注意を促したり。……中略……もし学校生徒をして放漫自ら制せず、あるいは礼節を藐視し、あるいは粗野の行為を敢てし、奇矯これを喜ぶごとき陋習を長ぜしむることあらば、ひとり教育上の失体のみならず、ひいて国家の威信を失墜し、その体面を汚瀆することなきを保せず。よろしく恭しみて、叡旨を奉体し、この際なお一層、学校長及び教員を督励し、よく戒慎を加え、篤く本分を殫し、もって生徒教養の方を誤ることなきを期せしむるに努むべし。」⁽¹⁾

当時の愛知県では、校長排斥運動が、愛知一中において頻発していた。県知事沖守固は、空席となった愛知一中校長の後任の人選に頭を悩ましていた。沖は、愛知一中の卒業生であり、文部次官でもあった奥田義人に、その人選を依頼するのであった。この奥田の推薦で日比野が校長に任命されることになる。日比野は従来の校長と違って教育界の出身ではなく、愛知県尋常中学(愛知一中の前身)の卒業生で、東京帝国大学を経て、農商務省に務める法学士であった。日比野は混乱をしている母校の話聞き、愛知一中の校長に自薦した。

「…この時に際し、この地に於て、育英の事に従ふ、責務洵に重且果して克く重大なる責務に堪へ、栄誉ある母校に、親愛なる郷国の後進を教養し、国家の進運に貢献する所あるを得べしや否やと。而もまた謂へらく、予や固より菲才、然りと雖も、予の郷国を愛する、予の母校を慕へる、竊に人後に落ちざるを信ず、一片の赤心ここに存せば、以てよく熱誠にして渝らず、よく眞摯にして変せず、よく厳格にして苟もせざることを期するに、惕若たらんか、或は全く貢献する所なきを必ずべけんや。予の教育の事業に於て、多く

経験する所なく、多く曉得する所なしと雖も、庶くはこの一片の赤心と、三者の所期とを以てせんと、比の如くにして、予は予の任に就けり。⁽²⁾」

とその就任にあたるに際しての決意を語っている。

1899（明治32）年9月11日、就任の挨拶に立った日比野は

「不肖、乏を本校長に受け、自今諸君と親しく相交わるの機を得たるは、予が望外の幸なり。……中略……こいねがわくば諸君よ。勉強、忍耐、熱心、誠実、気概、十分なる健康によりてこの順境を利用し、爛慢なる天真さを發揮し、もって他日、国家有要の良材となるの礎を作られんことを」⁽³⁾

と前置きをして、日比野の学校管理の方針を宣言する。

「外形的検束の効を得んことは、すなわち、規則にこれを求め得べし。しかれども、予は諸君を待つに外迫的の圧力をもってせんとするものにあらず。諸君もまた慎重みずから高うし、県下学生の模範をもってみずから任じ、知を研ぎ、徳を養い、自治自修をつとめ、あえて諸君に臨むに校規をもってせざるべからざるの導火線を布くことなからんことを」⁽⁴⁾

寄宿舎規則が極度に厳しく、生徒の自由を束縛するといつては同盟休講、はては校長排斥にまで及んだ、この愛知一中に赴任するにあたって、最初に宣言したのは、生徒の自主性を尊重し、自由を束縛する規則は設けたくないということである。そしてこの演説の中には、日比野の中学校教育への基本的視座である。知育・徳育・体育の鼎立という理念の端緒が、「知を研ぎ、徳を養い」という言葉の中に、早くも伺い知ることが出来る。

若さゆえに暴発するエネルギーを、外から押えこむことではなく、生徒の自主性を尊重し、彼ら自身の自尊心をくすぐり、自治自修に励ますのが、日比野の愛知一中の管理に対する第一歩である。他方では中学管理私見を発表しその方針をより一層徹底化する。その管理私見は以下の項目よりなる。(一)中学の位置(社会的位置)(二)教員の選択及び調和(学校運営の責任は校長に、教科の責任は教員に一任。全国第一級の教員を招く必要性)(三)授業の監督、(四)学生の陶冶、(五)教場の整理(学業をすすめ気品を養なわす)(六)寄宿舎の管理。⁽⁵⁾

この管理私見の要旨は、生徒の陶冶に重点をおき、生徒の品性を高め体力を

鍛え、質実剛健の気風を養うために運動を奨励することにあった。

とまれ、荒廃した愛知一中の再建にあたって、日比野は生徒の持つエネルギーを抑圧せずに、運動を奨励することによって昇華させようとする。日比野は単に運動を奨励するにとどまらず、自から生徒とともに、放課後のグラウンドに立ち、連日、テニスなどに汗を流すのである。32歳の日比野は、常に生徒とともにあることを念頭に、学校管理を行う。このことを、日比野は「抱き鯉教⁽⁶⁾育」といい、生徒と交っている過程で、生徒一人一人個性を見出し、さらにその本質の特徴をみつけ、それを抽出、助長して結実させようと努力するのである。

こうして、日比野は、生徒とグラウンドで運動に打込む中から、教育における『運動』の価値を見い出すに至るのである。1900（明治33）年11月25日発行の『学友会雑誌』改め『学林』55号に投稿し、運動のもつ教育的意義について力説する。

「強健なる身体は強健なる精神を包むとは蓋し千古一貫の至言たり。……中略……身心の發育の熾なる時に際し、十分に身心を鍛錬して、其發達を調和し、成功せしめて、天命を全うし以て、社会に対して国家に対して、郷閭に対して一族に対して、負べる責任を尽くして人生の第一要義を全ふすべきは国民当然の覚悟ならざるべからず。」⁽⁷⁾

人間の發達における身心の調和の重要性を最初に確認し、さらに論をすすめて曰く、

「我国明治の初年更始一新に續で新思想は洋の西より來りて在來の舊思想は其位置を譲り、危堅勉強を之れ事とし二六時中讀書にのみ耽りて顔色蒼白、自ら肉を啖ひ自ら血を啜ふが如き前後を弁せざる讀書家は今や去りて、新空氣に呼吸する讀書家之に代はれり。新日本の讀書家は現時に學んで之を將來に顯はさんとし遠大の目的を偉壯の抱負とを有するが故に、其の素志を正確に達せんが為めに一面心を潜めて勉強し、一面意を心身の發育と健康の維持とに用ゐて運動をなし、後を顧み前を考へ、右に思ひ左に察して、能く學び能く遊び以て今日の苦學をして將來の美果たらしむるの得策なるを解せざる

はなし。然り勉学と運動とは均しく学生に必須の科目にして、勉強の後には運動を必要とし、運動の後には勉強を必要とし、運動のみに耽るも将又勉強にのみ耽るも等しく学生の前途に大障害を与ふるものなること火を踏るよりも明かなるものあり。……中略……此至當なる範域を守りて勉学し運動して学生の真相を發揮せんことは難事たり。或は勉学の一方に傾き、或は運動の過度に流れ易きものにして、其中庸を行くことは普通学生の殆ど能くする能はざる所あれば篤と此辺に心を配はりて能く学び且つ能く遊びて、以て身心の發育を十分にし、心の健康を害することなく、能く運動世界の学生たり、又同時に能く勉強世界の学生たることを勉めざるべからず。これ実に有為なる学生の本分たればなり。⁽⁸⁾

ここに、日比野は学生生活の範を「運動と勉学の両立」に求める。そしてそこに真の身心發達の理想像をみるのである。そして最後に

「吾人現時の情況に応じて克くこの良能を全うし、以て他日、国家の良材たる基礎を今日に當為せんことは吾人の第一要義として瞬時も忘るべからざるものたるなり。⁽⁹⁾

と結ぶ。

日比野の脳裏には「ワートルローの戦勝は、イートンの運動場から」といわれた、イギリスのパブリックスクールにおけるスポーツ教育がもたらした教育的効果が思いめぐらされている。しかし、この時点における日比野の「運動」に対する考え方は、勉学と運動の両立といった一般的認識に留っていた。その運動の奨励も、学友会活動としての「運動部」活動の活発化というところにあった。しかし日比野の連日のグラウンドにおける運動実践の中から、一般論としての「運動」の意義の認知の域を出て

「運動が精神上に及す関係の大なるは其野球たると庭球技たるとを問わず其剣道たると柔道たるとを論ぜず共に各々の特有の長所ありて其練習が精神の修養工夫に須つ所甚だ切なる事実に於て能く之を認むべし。⁽¹⁰⁾

として、具体的に各々のスポーツの持つ特性を認識し、それぞれのスポーツの持つ価値を評価し、そこで学ぶことの出来る諸徳目を見い出すのである。又、

その後、新渡戸稲造らによって主張された野球害毒論などと違い、日比野は「野球」を教育の中に位置づけて

「輓近の日本は体育のこと勃然として盛に運動界頓に生氣を帯び来り青年学生の志気これが為めに鼓舞振作せらるるの効蓋し測るべからざるものあり特に漕艇及野球に至りては蓄に身体を鍛ひ精神を鍊る所以に資する止まらず青年学生がこれによりて得る所決して鮮少にあらざるべし。抑青年学生の野球に於けるや其身体及精神を強健に発達せしめ且つ強健に維持することを得るのみならず其間全く忘念を清掃して心身を快活に慰安し得るものたり且夫野球は規律あるを求め節制あるを要し訓練の要を教へ共同作用の必須なるを示し進取の気鋭嬰守の沈着なるべきを覚らしむものたり苟も野球を知る者は進退動作に一定の規矩と節制との欠くべからざるを知らざるはなく野球が共同⁽¹¹⁾の精神を養成する。……」

と述べている。

しかし、何はともあれ、地位も年齢もこえて、校長自らが、若い生徒たちと一緒に汗を流し、睦まじくスポーツに興ずることによりお互いの胸を開き、意志の疎通をひらき、相互の思想・感情を融和させてゆく。こうした実践とスペンサーをはじめとする諸外国、とりわけ英国の文献の学習により得た知識が複合されて、日比野の「運動」に対する思想が形成されてゆく。そしてその思想は「知育・徳育・体育の鼎立」という理念となって登場する。

2. 知育・徳育・体育の鼎立と「運動」

日比野の校長卦任後に、彼が行った学校管理の方針は大別して三つの方法が存在していた。その第一には、校長排斥などの問題に発展した諸規則による学生への拘束を緩め、学生に自由を与え、彼らの自主性に期待をしたこと。第二には、自由を与える一方、「中学管理私見」「生徒・保護人心得概要」などの通達を出したり、一流名士（加藤高明、大隅重信など）を招聘し講演会を開催したりする中で、中学とは何かを徹底させ、あまつさえ父兄にもこの教育の方向性を伝達し、学校・家庭一体となり、この中学教育を成立させようとした。第

三には、全国的な風潮でもあった学内の暴力的荒廃に対して、その学生の持つエネルギーの昇華策として、放課後の「運動」を奨励したことである。日比野はこれらの実践を通して、愛知一中教育を再興しようと努めるのである。

日比野は日常の自分自身の実践の中から、次第に「運動」における精神修練の意義を強調するようになる。そして生徒をして「運動部」に入部せしめるよう勧奨するのである。ここにおいて、日比野は「運動」にエネルギーの昇華という意味だけでなく、精神・身体の訓育・陶冶という意義を見い出すに到るのである。しかしこの時点では、日比野は、生徒全員を「運動」に参加させることを考えるには到っていない。学友会活動における「運動部」の活動に対する勧奨にとどまっていた。

しかし、日比野の「運動」に対する認識が深化するのも、この1905(明治38)年頃からである。それは生徒の「運動部」への入部を奨励するに留まらず、全校生徒を「運動」に向かわしめ、その「運動」の持つ教育的効果を引き出そうとするのである。日比野は1905(明治38)年『学林』61号の裏表紙に、ユベナリスの箴言“Mens Sana in Corpore Sano,”、“A Sound mind in a sound body,”、「聰明の心は強壯の身体に住す」という言葉を記した。以後、『学林』の表紙裏に継続的にこの言葉が掲載されて、生徒たちに長く親しまれ、暗誦されて、愛知一中最初の本格的校訓となる。

さらに、1906(明治39)年9月発行の『学林』には講演要旨「運動の眞義」なる文章を寄せ

「運動其度に適せば、則ち青年にありては、身心の發育を好良ならしむるものにして、成年にありては、身心の強健を保持せしむるに適するものたり、運動は實に人生保存の主要なる方法なりと謂ふも過言に⁽¹²⁾あらず」

と述べ、運動の持つ意義をただ単に、青年期において認識するのみならず、成年期においてもその意義を認識している。さらに「人生保存」の主要な方法として運動の価値を捉えようとしている。その上、人生のパースペクティブの中における青年期の特徴を的確に把握し、

「心身の鍛練は、青年時代を以て最良となすべし、この最良の時代の青年学

生を督励鼓舞して、心身の鍛練に砕心せしむるは極めて必要の事たり。比の必要に応ぜんには青年学生を駆りて有益な運動をなさしむるを以て適良手段となす。……中略……学生の本分として心身修練に必要な運動をなすのみ、体軀の發育、養成に資し、兼ねて心身を訓練し、以て他日の奉公を期するが為に、吾人青年の学生は運動に務むものたり。……中略……特に青年学生督鞭の任に当れる吾人は、比確信に依り、又比確信の實驗に拠り、青年学生の体育及び訓練に運動の極めて必要にして、切実なるを認識する者也。⁽¹³⁾と述べている。日比野は、人間における運動の重要性を、人間の一生を貫く問題として認識している。

「身体」の鍛練は青年期にこそ重要であると説き、この時代（生徒）に運動することの意義を力説する。さらに、青年期における運動の価値を、別の側面から見い出している。

「所謂、体育、智育、徳育が、運動に待つことの少なからざるは、輓近に至りて特に普く了解せらるるに及べり。夫の優劣を争ひ、勝敗を競ふべき競技的運動に於ては、勇往、邁進、不撓、不屈、克己、忍耐、及び心力集中の美德等、自ら修養するを得るものにして、運動時に心力を集注するは、即ち腦裏を廓清するの一手段にして……」⁽¹⁴⁾

日比野は、ここで、運動と知育、徳育、体育との関係についての認識を、従来のそれよりも一歩すすめている。それは、体育＝運動と考えられていた両者の関係を改め、体育、知育、徳育の全体にとって「運動」の持つ価値が大きいとするものである。さらに日比野は、このことを、学林の中で次のように論じている。

「比の如く、本校の運動を見る、単に遊戯的誤樂的に健康の増進を計るといふにあらずして、寧ろ運動其者を以て教科の一科と認むるに在るを以て、運動に従事する態度如何に因て、域は意志の鍛練に資するものあるべく、或は真撓事に当るの風を起すものあるべく、或は注意力の養成に興りて力あるべき、或は又精神集中の効果を見るを得べく、或は実力養成の要を悟るものあるべく、又態度如何に依て、是等は反対の結果を生ずるをも直接に知り得べ

きものあるべし。……中略……学校長の講堂に於ける訓示が運動に言及せざる事なきが如きも、此点よりするものにして、運動はある意味において本校教化の中心を為せり。⁽¹⁵⁾

こうした、『運動』に対する、日比野の認識の深まりは、論理的必然として、「運動」を全校生徒に課すようになる。日比野にとって「運動」とは、従来考えられたような、同好の者によってスポーツ（運動部としての生活）を行い、そこで身心を練磨する、という方法とは別に、全校生徒を対象とする「運動実践」へと、向わざるを得なくなってゆくのである。

日比野は、ここで全校生徒が「運動」を実践することが可能な「運動種目」を模索する。

「予は総ての運動に趣味を有し、直接、間接に、総ての運動に関係を有せり、予は野球、庭球、柔剣、弓術、操艇、泅水（水泳）、蹴鞠、散策、深呼吸、冷水まさつ、正座法、若しくは其他のあらゆる衛生的運動、又は衛生的方法に就きて、或は自ら之を実行するか、或は校内八百の学生の実行するを目睹し、常に興味と熱心とを以て、観察研究を怠らざらんとする者なり。而も、あらゆる運動中、簡単にして、時間をも費さず、金銭をも要せず、よく各自の天分に応じて、心身を鍛練するを得るものは『駈歩』を最とするを信ずる者なり。⁽¹⁶⁾

ここに『駈歩』（後にマラソンと命名される）が愛知一中における校技として登場するのである。時に、1908（明治41）年、日比野41歳のときである。

日比野は、後に彼の座右の銘になる「病める者は医者に行け、弱きものは歩け、健康なる者は走れ、強きものは競走せよ」と提唱し、生徒を鼓舞し、愛知一中生全体の中に、この「駈歩」を実施してゆく。この駈歩に不参加を許される者は、校医大田益三の診断書のついた者のみであった。教科を休むのには寛容であった日比野も、この駈歩を休むことについては容赦をしなかった。

3. 駈歩・マラソンと身神保健

この駈歩は、毎日放課後、校門に集合して開始される。日比野校長を先頭に

シャツ一枚、半ズボン一枚の全校生徒が、彗星のごとく街中を駆け抜けるのである。短い日で、練兵場一周(4,600m)、三階橋往復(8,500m~10,000m)、長い日では、熱田神宮往復、清州城址往復(約24,000m)などのコースを走破⁽¹⁷⁾した。また、日比野が自ら先頭に立ち、始めはゆっくりと走り、調子が出てきたところで、勢いのあるものを先にゆかせるという方法をとった。こうした駆歩の練習の中で頭角をあらわした者は、「強きものは競走せよ」の言葉通り、競走部に入らされ、国内の諸大会に参加するようになる。

早くも、1909(明治42)年には、大阪毎日新聞社主催の阪神間20哩大競走に愛知一中生が2人参加し、総員128人の中で、古橋猶三郎は9着、林鎌次郎が11着⁽¹⁸⁾と大健斗をする。日々の練習のほかに、学校行事としてマラソン大会が登場してくる。1910年(明治43)年には、新校舎の落成を祝って、津島往復28哩長距離競走が行なわれ、171人の選手がこれに参加した。これに参加するには厳重な身体検査をパスしなければならなかった。またレースにあたって、競走監督、準備係、通路監督、衛生隊長、自転車による伴走などの万全の策が構⁽¹⁹⁾じられた。翌1911(明治44)年2月16日には、学校創立34回を記念して、全校生徒が走った。3年以上350人は遠距離競走、2年以下450人は団体駆歩を行った。遠距離競走は学校から八事山興正寺山門までの10哩、団体駆歩は清州城址まで片道12kmで行なわれ、1人の落伍者も出さなかった。以後、この二つの競走は恒例行事として、愛知一中の中に定着⁽²⁰⁾した。

こうした駆歩(マラソン)の練習の成果は着実にあらわれてくる。1912(明治45)年4月の大阪毎日新聞主催の大阪・箕面間山野横断競走に愛知一中生15人が出場し、全国から参加した300余人と足を競い、愛知一中3年の田舎片善次が優勝し、50着までに7人が入賞した。同年5月の岐阜マラソン大会においても、田舎片善次が優勝をさらう。さらに1913(大正2)年1月、第一回極東オリンピックがマニラで開催され、愛知一中4年の田舎片善次は、5哩競走マラソン、1哩競走の2種目に優勝するという快挙をなしとげたのである。このように校内の駆歩マラソンから、日本のいな極東の中心選手を、輩出するまでになるのである。

日比野の心は、こうした競技力の向上だけにむけられているのではない。むしろ日比野の関心は、常に生徒の身心の調和的発達＝知育・徳育・体育の鼎立、ないしは体力と学力の並進に注がれている。日比野は「健全なる精神は、健全なる身体に宿る」というユベナリスの箴言を引用したり、「病めるものは医者にゆけ、弱き者は歩け、健康な者は走れ、強き者は競走せよ」といった、彼自身の造語をもって生徒を「運動」へ、「駈歩」へと向わしめる。

そして、日比野は「駈歩」を通して、体育はもちろん、知育・徳育も出来ることを主張する。駈歩が精神に偉大な効能があるとして

「駈歩より起る肉体上の効果は畧前に述べたが、精神上にも少なからざる利益を被るものである。苟も競走界の選手を以て任じ、一角に覇を稱せんと欲するならば、勢ひ青年に禁物の酒や煙草を止めなければならぬ。従って此等の贅物より起る恐る可き諸種の情欲を絶つことが出来る。若し夫れ一旦輸贏を争ふ晴の野に立つならば吾人は痛切に処生上の大教訓を感得することが出来る。即ち五里六里と与えられたる長距離を駈けぬける場合には、恰も一升の水を与えられて所定の場所に万遍なく撒くようなものである。最初から全力を出せば決勝点まで保たない。良く自分の実力を自覚して、力を出し切らず、たとへ途中で濠があるも丘があるも水溜があるも決して軽機みに飛び越へず力を抑へて、加減して細く長く持続して、決勝点に近づくも、猶余力充溢して如何なく努力も拂へるやうにせねばならぬ。夫れが為にはよし最初の出発において对手が如何に飛躍を試みやうとも、自分は自分の信じて是なりとする歩調を取って、決して釣り込まれるなきやうな軽佻なことがあってはならぬ。其場合一小区々たる勝敗に気を奪はれると、直ちに釣り込まれて終局に達せぬ迄に倒れるやうなことになる。比他は早く行かうが遅く行かうが敢て念頭になく、自分は自分の遣れる丈のことを発輝して、怖めず意せず行くといふことは、社会を大きく渡る上に於て大なる要訣である。」⁽²¹⁾「競走を練習すると公平の觀念が養はれる。一度運動の野に立てば些の卑劣行為を許されぬ。たとえ己れより弱者があるとはいへ腕力で轉がして夫より先に出ることは出来ぬ。公平心と共に処世上必要な独立心が養われる。幾十の競走者

に交って其勝敗を決する場合徹頭徹尾己れに頼って、毛頭も他に頼ることは出来ない、長距離の競走になれば、初めは体力に頼るけれども、一定の時を過ぎれば、最早体力は用を為さぬ確乎なる自信力、即ち精神の力を以て体を運ぶ丈である。即ち他との競争でなく、自分の体と精神との競争になる。努力の練習になる。忍耐力の練習になる。此等は直ちに取って以て日常執務上の持久力となるのである。」⁽²²⁾

日比野は、その駢歩の練習や競走の過程で多くのことが学べることに注目した。そして禁欲、忍耐、精神的持久力、志気、独立心、克己心、公平心、不撓不屈の精神等をこの駢歩の実践を通して学ぶことは、知育、徳育にも通ずることだと日比野は強調する。

このように、学生の身体的力のみならず、精神的な力をも、この駢歩で教育しようとする。その両者の調和のとれた発達、さらに体力と学力の並進、このような状況が全うされるところに、日比野の中学生に対する理想像が存在する。

次に、日比野は、その駢歩の実施方法にも十分な注意を払い提起する。

「新入生が入学すると手初めに、毎週五日づつ必ず授業に駢歩を一回やらせる。駢歩をやらせるときは襦袢一枚になって、初めは十町、十五町を限度として練習し、終ひには一里二里を走る。此方法を二学年になる迄持続すると、容易に三里、四里の途が休みなく走れるようになる。」⁽²³⁾

「駢歩といっても、最初は何も競争をやるように疾走する必要はない。自己の苦しく感じない歩調で初め、馴るに従って速度を増せばよい。練習時間も長くやるに当らぬ。」⁽²⁴⁾

と自らの体験で得た教訓を生徒らに教示する。このことや、自らが先頭に立ち、ゆっくりと走り、調子が出るまで誘導し、運動生理学用語でいえば second wind に達したときに、力のある生徒を先にゆかせる方法などは、今日の運動生理学の知見と合致するものである。さらに、生徒の心身の鍛錬として「駢歩・マラソン」を選んだことも、今日の運動生理学の理にかなったものである。すなわち、駢歩・マラソンといった有酸素運動は「全身持久力」を高めるのに格

好なトレーニングだということが、科学的データをもとに証明されているからである。1900年初頭から一貫して日比野が主張している「マラソン」による健康増進法の先見性には驚愕の念をいだかずにはいられない。

さらに、日比野は駢歩の走法にも論及して曰く、

「上体は疲るるに従って屈み勝ちのものであるが、如何なることがあっても前に屈まず、直立の姿勢を保たなければならない。」⁽²⁵⁾

とし、後年の日比野式走法の原型とも言うべき要領がここに示されている。日比野式走法とは、柔道で言う「自然本体」と同じ姿勢で走ることを言う。むやみに上体を曲げたり、屈めたりすることなく、自然のまま上体を垂直にして、走ることを強調する。長い距離をロスなく走るために、日比野が体得した理論である。日比野は、後世、この日比野式「垂直」走法をもって、国民体位の向上をめざす全国行脚・世界行脚に出ることになる。

このようにして、愛知一中の全校生徒による駢歩は、学校の中に定着してゆくのである。日比野はこの駢歩の実践を続ける中で、この駢歩の持つ意義をさらに深く認識するようになる。1914（大正3）年2月に発行された、『学林』77号の中に「体育と駢歩」という論稿を寄せている。

「雄大なる精神、剛邁なる気魄は独り健全なる身体の宿し得る所にして、身体の健全は活動的人物の第一に庶幾すべき要件たらずんばあらず。身体健全にして、雄大なる精神、剛邁なる気魄を具へば、彼の怪疑煩悶不安疲憊等の病的現象は除かずとも、自ら雲散霧消し了るべきなり、しかも、この活動的人物の第一に庶幾すべき身体の健全は、文運の進歩に伴ひて、益々これを得るに困難を感じ社会人士の体質日に軟弱に傾き愈々彼の病的現象の蔓延するありて、甚しく識者をして憂慮せしむるものあるは如何。吾人は憂ふべく恐るべき如上の現象に対して、漫に之を、文明の進歩に伴ひて免るべからざるものとなし、拱手黙座、徒に慷慨して看過するに忍びざるなり。さるにても、吾人の身体は性来この文明の圧迫魔力に屈服せざるべからざる程、しかく軟弱に作られたるものなりや、是れ先づ解決すべき主要なる問題なり。然れどもそは考慮するまでもなく、十分なる確信をもって断言せらるべし、吾

人は打克つべく作られたりと。……中略……さらば、吾人は如何にして、この文運の進歩より来る吾人身体の軟化を防ぎ、健全なる体軀を養成し、雄大な精神と剛邁なる気魄とを具へたる活動的人物たるべきか。吾人日常の生活は、文化の開拓せらるゝと共に、益々便利なるを得、日常生活の便利は、愈々吾人をして怠惰ならしむ。吾人の身体は、固より活動に適すべく作られたるも、苟安に慣れては、逸樂の状態に居るを怡び、甘んじて之を活動せしめざるに至る。夫れ世間諸般の事物は用ふるに従ひて消耗するを常とすれども、吾人の身体は用ひざるに従ひて軟弱に趨く、是れ吾人が吾人の眼前に現はるゝ事実によりて知了せる所たるなり。故に吾人はその身体を強健ならしむる為に、常に本然の約束の如く、それを活動せしむることを忘るべからず、即ち適宜の運動を為すことを忘るべからざるなり。……中略……

吾人が健全有為の身体を鍛成すべきの要は既に之を述べ尽せり。然らば吾人が之に対して執るべき方法は如何、曰くこれ固より運動に在りしかも極めて簡易にして尤も効驗ある好良の方法あり、請ふ、試に之を提供せんか。諺にいふ、秘事は睫毛と、吾人の方法は身体を活動をせしむるにあり、それは最も簡單なり、『駈歩』これなり。

駈歩は吾人をして一層健康ならしむる最良の方法なり、そが、文明に伴ふ吾人の退歩軟化を防ぐ最良の方法なることは吾人の信じて疑はざる所なり。吾人は天下の青年諸君に望む、毎日約30分即ち15分往復程の駈歩を日課とせんことを、是れ、決して兒戯に非ざるなり、文明の悪影響を避けんが為に、吾人本来の活動的身軀を鍛成する真摯の事業なり。⁽²⁶⁾

日比野は、明治維新・文明開化・殖産興業と、続いた社会の中で、人間の身体に文明の悪影響が投影し、不健康状態をひきおこしている社会的現実を直視し、この駈歩の持つ意義を強く主張するのである。日比野の運動、体育などの認識はここに到ってよいよ深いものとなってくる。学生生徒のエネルギー昇華、運動と勉学の両立、知育徳育体育の鼎立、全校生の駈歩の実践というように、日比野の運動や体育に対する考え方は、深まりと拡がりを見せるのであるが、ここに到って、社会的現実とのかかわりにおける、人間存在の不健康さを看破し、

その解消に「運動・駈歩」の必要性を説くのである。ここに日比野における体育・駈歩は、愛知一中生のみを視野には入れず、広く国民全体へとその視界は広がってゆく。今日的な表現を用いれば、国民スポーツ・生涯体育としての『駈歩』を志向するのである。

こうした、日比野の思考の中で、彼は『身神保健』⁽²⁷⁾（身心ではなく、身神である）という理念を打ち立て、愛知一中の新たなスローガンとする。

「吾人、ひとたび生れてその使命を果し、その大任を尽さんとす。すなわち身神の健全にまたざるべからず。身神の健全はいかにして得らるるか。健全なる精神は健康なる身体に宿るの古諺は、吾人の常に忘るる能わざるところにして、身神保健は吾人の標語として、常に肝に銘ずるところたり」⁽²⁸⁾

この身神保健の新しいスローガンは、従来からの“Mens sana in corpore sano”“病める者は医者へ行け、弱き者は歩け、健康なるものは走れ、強きものは競走せよ”“運動を愛せよ”などともに愛知一中の生徒の中に浸透し、愛知一中の運動教育は佳境に入ってゆく。駈歩の全校的盛り上りは愛知一中全体に志気を呼びおこし、全校生徒の息吹きはすさまじいものがあった。競走部の活躍はもちろんのこと、庭球部、柔道部、剣道部、端艇部などは全国中等学校大会で次々と優勝をした。さらに野球部も1917（大正6）年第三回全国中等学校優勝野球大会に優勝し、深紅の優勝旗を愛知一中にもたらした。さらに同年、東京奠都50年を記念して行なわれた、東海道五十三次を夜を日について一気にかけて抜ける東西対抗駅伝競走に、愛知一中生のみで西軍選手を引き受け、日比野校長をはじめ、日頃鍛えしその健脚を披露した。

日比野はこうした愛知一中の運動教育の盛り上りの中においても、本来の中学校のあるべき姿をきっちりと把握し、1917（大正6）年の『学林』83号に「体力と学力の並進」という論文を寄せている。

「体力を増進し其学力を琢磨して遺憾なくば冀くは以て未来の中堅国民たるに恥ぢざるべし。体力にも優れ学力にも勝れる青年学生たらんことは、青年学生全部の冀望にして、真正の中堅国民たらんことは、青年学生全部の抱負たるべし。世の青年学生指導啓発の任に当れる教育者及先輩は断わず思を

此処に致さざるべからず。……中略……世人をして、体力の増進は学力の不成積を因由するものと早合点せしむることあるいは、誠に遺憾の極なり。如上の弊に陥ることなく、体力を増進せんか、学力はまた従ひて自ら進歩すべし。学力進歩して知識を増し用意を周到ならしむるを得ば、体力を増進する上に於て、其知識其用意其学力は自ら援用せられざるべからず。体力の増進は学力の進歩を意味し、学力の進歩は体力の増進を意味せざるべからず。体力の増進と学力の進歩と相離れ相一致せざる場合は、体力及学力の進歩増進に従事する者の不注意不心得より来るものにして、心身両健の一致は理の当然にして、この当然の結果を得ることに充全の注意を用ゐて、青年学生たる修養を積むに於て遺憾なきを期せざるべからず。これをこれ、吾人は現時の青年学生に切望して措く能はざるものなり。⁽²⁹⁾

この文章が、日比野の校長として、寄稿した最後の論文である。日比野の教育理念・実践内容を如実に表現している一文といえる。大正6年3月3日をもって、17年間にわたった愛知一中校長を辞している。

結 び

若干、32歳で母校、愛知一中の校長として赴任した日比野寛は、殺伐とした母校の姿をみて啞然とした。当時の中学校の多くがそうであったように、愛知一中にも俠気・蛮勇の風が吹きあれていた。この中学校を経営するにあたり、その施策として、彼は課外における「運動」を奨励した。中学生の持てるエネルギーの昇華策として「運動」を奨励した。日比野は「運動」を、ただ単に奨励するのに留まらず、自らグラウンドに立ち、生徒とともに「運動実践」を行った。日比野は、生徒と共にグラウンドに立ち、汗を流すこの実践の中から多くのことを学びとってゆく。中学生にとって従来の校長は、彼らの自由を抑圧する管理者であったのであるが、この日比野は異質な校長であった。この日比野のグラウンドにおける運動実践は、生徒にとっては生徒と校長という枠をとり払い、感情的に融和しうる絶好の場であった。また日比野にとっては、教室においては見落しがちな生徒の個性を発見する最良の場であった。ここにいたっ

て、愛知一中における「運動」は、生徒のエネルギーの昇華を意味するのみならず「教育」の場としての意味がそこに出て来た。日比野は、日常的な「運動実践」の中から、教育における「運動」の位置を自ら「体感」していた。

日比野は、最初「運動」は勉学と両立させなければならないという、「運動と勉学の両立」という常識的なところに、中学生における運動の位置を考えていた。しかし、彼の連日の実践観察のなかから、「知育・徳育・体育の鼎立」ということを考え出す。しかも、運動＝体育、あとの知育と徳育は別な教科でという発想ではない。もちろん「体育」は「運動」におうところが多いわけであるが、「運動」によって「知育」も、「徳育」も為し遂げられるとするのである。あたかもイギリスのパブリックスクールにおけるスポーツ教育のごときである。日比野は、「運動」における教育の意義を深く把握するに従って、この「運動」を一部愛好者による課外活動の奨励だけではすまなくなってくる。「『運動』の実践を全校生徒に」と考えてくるのである。手軽に行いえて、多人数で行えて、生徒の体力増強・健康な身体づくりにみあう「運動」と模索する。そこで考案されたのが「駈歩・マラソン」である。日比野はこの「駈歩」は、文明の進歩下における身体の脆弱化を防ぎ、身体の持久性を高め、さらに、意志力、精神的忍耐力、自立心、保健思想等々を鍛えるのにも絶好なスポーツであるとする。日比野の「駈歩」に生徒をむかわしめるその根柢の奥深くには「聰明の心は強壯の身体に住す」といった彼の身体観がそこに存在している。

明治時代後半から大正時代前期におけるこの日比野の実践は、当時の体育が「体操」を中心とされていた状況からみても特徴的である。法学士の日比野をして、このような「運動」「駈歩」にむかわしめたものは何か。日比野の生徒達に対する配慮の焦点は「健康に生きる」ということであった。日比野の造語によれば「身神保健」である。将来の日本の中堅になろうとする愛知一中生たちが、健康に生き、その能力を如何なく発揮する。これが日比野の愛知一中教育理念の根底にあった。日比野の揮毫になる「健康報国」、これが日比野の中学教育における基本的視座である。そしてさらに運動のもつさまざまな属性を利用して学生を鍛えてゆこうとするのである。

ここにおいて、「運動」は、日比野の言う、「病める者は医者に行け、弱き者は歩け、健康な者は走れ、強き者は競走せよ」というように、万人に欠くべからざるものとして認識されている。彼はのちに愛知一中校長を辞して、この駈歩をもって、国民の体位向上、健康増進に供せんと全国行脚・世界行脚に出かけるのである。日比野における「運動」に対する認識は、生徒のエネルギー昇華策に始って、とてつもなく大きく深い拡がりを見せるのである。

注

- (1) 大野一英, 愛知一中物語, (上), 中日新聞, 1977, p. 116.
- (2) 愛知教育界雑誌, 1909, p. 1-2, 「十周年学校長を為し又猶ほ現に為しつつある事の抱負」日比野寛
- (3) 扶桑新聞, 1899年9月12日, 「新任校長の教育方針」
- (4) 同上
- (5) 鏡光百年史, 愛知一中創立百年祭実行委員会, 1978, p. 97.
- (6) 大野一英, 前掲書, p. 146, 「抱き鯉というのは、鯉をとる漁法の一つで、池の中で鯉と人間と一緒に泳ぎ廻り、鯉が疲れて岩かげに休んだところを手づかみにするもの、日比野の教育は、深い慈愛の眼で生徒を包む。撰取不捨。いとおいしいものと一緒に苦しみも喜びも共にしてやる。そこにこそ無法の青春群像を引きつける魅力があった。日比野の抱き鯉教育の真価は喜怒哀楽をこえて生徒を抱き上げ、撰め取り、救い上げようとするところにあった。」
- (7) 「学林」55号, 1900年, 1月25日, p. 54-55, 運動世界の学生, 日比野寛
- (8) 学林, 同上書, p. 55-56.
- (9) 学林, 同上書, p. 56.
- (10) 愛知教育界雑誌, 前掲書, p. 12.
- (11) 愛知教育界雑誌, 同上書, p. 9-10.
- (12) 学林, 62号, 1906年7月, p. 57, 運動の真義, 日比野寛
- (13) 学林, 62号, 同上書, p. 57-58.
- (14) 学林, 62号, 同上書, p. 57.
- (15) 学林, 77号, 1914年2月, p. 10-11, 愛知一中の体育方針, 日比野寛
- (16) 学林, 同上書, p. 8, 駈歩と体育, 日比野寛
- (17) 鏡光百年史, 前掲書, p. 141.
- (18) 鏡光百年史, 同上書, p. 143.
- (19) 鏡光百年史, 同上書, p. 141.
- (20) 鏡光百年史, 同上書, p. 142.
- (21) 学林, 77号, 前掲書, p. 5, 余の実践せし体力養成法, 日比野寛

- (22) 学林, 77号, 同上書, p. 5-6.
- (23) 学林, 77号, 同上書, p. 2.
- (24) 学林, 77号, 同上書, p. 3.
- (25) 学林, 77号, 同上書, p. 4.
- (26) 学林, 77号, 同上書, 体育と駆歩, 日比野寛, p. 2-6.
- (27) 大野一英, 前掲書, p. 179.
- (28) 大野一英, 同上書, p. 180.
- (29) 学林, 83号, 1917年2月, p. 1-2, 体力と学力の並進, 日比野寛

主要参考文献

- 大野一英, 「愛知一中物語」上・下 中日新聞社, 1977.
- 「鏡光百年史」愛知一中創立百年祭実行委員会, 1977.
- 青井東平, 那須秀一編「日比野寛伝」愛知一中会日比野寛伝発行委員会, 1959.
- 竹の下休蔵, 岸野雄三「近代日本学校体育史」東洋館出版社, 1959.
- 雑誌「学林」愛知一中学友会
- 雑誌「愛知教育界雑誌」

本稿を脱するにあたり、資料提供等のご協力を頂きました、日比野安氏に感謝申し上げます。